

## 『隣愛スタグネイト』 - ゼロイチ

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

「あたしね、結婚するんだ」

「———は？」

思わず目を向けたその先で、緩くパーマのかかった彼女の髪がふわりと揺れる。

社会人になってから染め直したのだという、いまだに見慣れない彼女のそのきれいな黒髪の向こう側に、銀色に縁取られた丸い壁掛け時計が見えた。

九時二十五分。ついさっき席に着いたばかりのようなつもりでいたが、気づけばこの居酒屋に入ってからすでに一時間ほどが経過していた。

おれはまずそのことに驚いて、そしてその後で、そういえば、今日の彼女は始めからどこか様子がおかしかったな、と。

今さらながらに、そう思ったのだった。

ところで彼女、藤井美咲はけっこうな酒好きである。

聞けば彼女は、子供の頃から親戚の集まりがあるたびに親には内緒で酒宴の席に潜り込んで、大人たちにせがんで彼らが持つその「不思議な味のする水」をこっそり飲ませてもらっていたらしい。

当時まだ酒を飲んだことのなかった自分が「そんなにおいしいものなのか」と聞くと、彼女はふふん、と得意げに笑って「へんな味だけど、理屈じゃないのよ」なんて、よくわからないことを言っていた。

ともかく、彼女はそれほどに酒が大好きではあるのだが、しかし一方で体質的にアルコールにはめっぽう弱いというのだから、なんとも難儀な奴である。そのことは彼女もよくわかっていて、だから普段はあまり早いうちから強い酒を飲んでしまわないように気をつけているのだと、以前本人から聞いたことがある。

こうして彼女と飲みに来ることは以前にもよくあったし、そういう時、彼女は始めのうちは大抵ソフトドリンクを注文していた。

それが今日はどういうわけか、彼女は最初からいきなり焼酎を注文したかと思うとなみなみとつながれたそれを一気に飲み干して見せ、そして案の定見る間に顔を真っ赤にさせていた。

そもそもその時点でおかしいと思うべきだったのだが。

ともかく。

始めのうちは、彼女も一応近況報告ができるくらいには意識もはっきりしていたのだ。

ところが時間が経つにつれ、まずどんどん呂律が回らなくなっていき、会話からはしだいに脈絡が消失し、それから数分もしないうちに何を喋っているかもよくわからないほどにべろべろに酔っぱらってしまっていた。

そんな様子の彼女を見て、また何か会社で嫌なことでもあったんだろう、なんてまったく見当違いなことを思っていた自分が、通りかかった店員にいくらか新しく注文をし終えたところで。

しばらくの間物言わぬ置物と化していた彼女は、うん、うんと幾度かうなずいた後、何の前置きもなくぼそりと、そうつぶやいたのだった。

「——今、なんて」

結局、とっさに口をついて出たのはそんな間抜けな言葉だった。

「……やっぱなんでもない」

そう言って、彼女は両腕に顔をうずめるようにして机に突っ伏してしまう。

小さく息を吐く。そうか。いきなり明日会いたいなんて言うから何かと思ったら、そういう話か。

「あー、ごめん。そうか、ついに結婚か。なんて言えればいいか……ともかく、おめでとう」

そう言ってしばらく黙っていると、ジッとうずくまっていた彼女はもぞもぞと動き出し、ちらりとだけこちらを見た後、すぐにまたその顔を引っ込めてしまった。

「やっぱり聞こえてるじゃん。悪趣味。最低」

腕の隙間からくぐもった声が聞こえてくる。

「いや、あんまり突然だったし。それに、やっぱりそういうことは、大事だから、ちゃんと美咲のほうを向きながら聞きたかったんだ」

今度はしばらく待ってみても反応がない。よけいに怒らせてしまっただろうか。そう思いために息をつきかけたところで、

「……そういうことなら、許す」

むすっとした顔を上げて彼女はそう言った。まだ顔は真っ赤だったが、もうそれほど酔ってはいないようだ。

彼女の目を見て、あらためて言葉を贈る。

「結婚おめでとう。美咲」

「……ありがと。智治」

彼女はそれからしばらくの間、ただちびちびと酒をなめているだけだった。自分も焼酎のグラスをときおり傾けながら黙っていると、彼女はしばらくして口を開いた。

「……昨日さ」

視線を向けると、彼女は下を向いて、両手で持ったグラスの中に浮かぶ丸い氷をじっと見つめていた。また酔いが回ってきたのか、頭がふらふらと不安定に揺れている。

「大助に告白されたんだ。プロポーズ。指輪、渡されて、結婚してくださいって」

「そうか」

「すごくうれしかった。もうずっと、会社、入る前からずっと付き合ってた。それで、ちょっと前からお母さんにも、早く結婚しろとか言われてて」

「ああ」

「でも、あいつ全然そんな、結婚とか、そんな素振りなくて。たまに話はするけど、なんかいつも、はぐらかされてるみたいな気がして」

「不安だったのか？」

尋ねながら、目を閉じてぐりぐりと眉間のあたりを指で押す。

美咲と大助。二人の幼馴染が付き合っていると、自分が知ったのはいつだったろう。少なくとも自分は、二人がそんなにも長く付き合っていたとは知らなかった。

二人との間に壁のようなものを自分が感じ始めたのは、いつからだったろう。

「不安じゃなかった、けど、ただ、なんか焦る気持ちはあったんだ。周りほとんど結婚して、仕事を辞めてく人もいたし、いつの間にか、あたしだけ、置いてかれてるような気がして」

「それが、不安だって言うんだよ。それでおばさんから、そんな風に言われてたなら、しんどかったろう」

ちょうど近くを通った店員に、焼酎のおかわりと、それから少し悩んで、ゆず茶のホットを注文する。

彼女が小さく鼻をすする音が聞こえた。

「それにしても、美咲。そんな昨日の今日で、こんなところで、おれなんかと飲んでていいのか？ 大助にも悪いし、それにそんなに、心配してくれるおばさんに顔でもみせてやったほうが……」

「いいじゃん。智治はあたし達の一番古い時からの、一番の友達だから、最初に伝えたかったんだ。あ、でもお母さんには昨日もう電話で話したから、智治は二番目だけ」

ごめんね、と笑う彼女を見た時、胸に鈍い痛みを覚えた。それが何から来るものな

のかはわからないが、じくじくと尾を引くその痛みは、服の上から胸を押さえてもなかなか消えてはくれなかった。

「光荣だな。おれもお前たちのことは、昔から一番の親友だと思ってるよ」

「ありがと」

そう言って彼女は、ふわりと花が咲いたように可憐に笑った。

傾けたグラスの中身がすでに空になっているのに気づいて、思わず苦笑いする。

「もう、そんな年でもないだろうに」

「ん、なんの話？」

「なんの話でもないよ。それにもう、終わった話だ」

そう言うと彼女は途端にまた不機嫌そうになる。昔から、猫のように気分屋な性分なのだ、彼女は。

と、ちょうど注文しておいた飲み物が運ばれてきた。落とさないように気をつけながら両方とも受け取り、少し濁った薄黄色のグラスのほうを持ち上げて、その取っ手をむくれる彼女のほうに向けてやる。

「ほら、ゆず茶。そろそろ酒は、抑えとかなないと、明日起きてからが辛いぞ」

「おー、ありがと。いつ頼んだの？ 今ちょうどあったかい飲み物欲しかったんだ」

さっきまでふくれていた頬の空気は見る間に抜けて、もうにこにこ笑っている。

仕方のない奴だ。ころころと表情が変わるのは、昔から見ていて飽きないが。

「付き合いだけは長いから。こういうことは、なんとなくでわかるさ」

ふうふうとグラスに息を吹きかけていた彼女は、おそろおそろといった風にグラスに口をつける。しかし、すぐにぎゅっと目をつぶったかと思うと、残念そうにグラスをテーブルに戻して言った。

「ふう……ほんとに。もう今年で、ええ、じゅう、十八年？それくらいの付き合いだしね。もともと一緒だった大助はともかく、まさかあの智治と、こんなに仲良くなるとは思ってなかったわ」

「あのってというのが、何を言ってるのかわからないが、そうだな。初めて会ってから十八年と、四か月くらいか」

自分もまさか、彼女とこれほどに縁が続くとは思っていなかった。

そもそも始めの頃は、いくら自分が遊びに誘っても――。

「ふふ。あたしねえ、最初は智治のこと大っ嫌いだったのよ？」

見ると、彼女は意地悪そうな笑みを浮かべていた。どうやら同じことを考えていたらしい。

「……知ってたよ。何回遊びに誘っても、見向きもしてくれなかった」

そう言うと、当時を思い出すように彼女は笑った。おれもたぶん笑っていた。

「あれって遊びに誘ってたの？ いきなりウサギのぬいぐるみなんて顔に押し付けてくるから、あたしずっと嫌がらせかと思ってた」

「あれが当時できる、精いっぱいだ。急に引越してきて、友達もまだいなかったから、子供なりに、お隣の子とは早く、友達になろうと」

渋い顔をしてそう答えている間、彼女はずっと笑っていた。

「それがなんで相手の顔にウサギをぐりぐりすることになるのっ」

「そんなこと、覚えてるわけないだろ」

忘れるわけがない。初めて会ってからはしばらくの間、自分が彼女のことをまともに見ていられなかった。それだけのこと。

「それを言うなら、こっちも言わせてもらおうか」

「えー？ あたし、智治に嫌がらせなんてしたことないって」

「だから、嫌がらせじゃないと。それに、そんなに昔のことじゃない、高校の時の話だ」

そう言うと何か思い当たる節があったのか、あー、と間延びした声を上げながら、彼女は頭を掻いた。

どういうわけか、少し照れくさそうに。

「？ ……まあ、いい。高校の時、たしか学年が二年に上がって、少ししてからだ。美咲、お前どうして急に、おれのことを避けたりするようになったんだ？ いまだに

思い当たることが何もないんだが」

それは本当に唐突だった。学年が上がってしばらくしてからのこと。一時期、ある時を境に彼女の自分への態度が劇的に変わったことがあった。

声をかけてもいつも生返事でどこかに行ってしまう。電車で乗り合わせても別の車両へ、学校で見かければさりげなく逃げられ、それでもめげずに何かイベント事に誘ってみても、ことごとく他の用事が入っているとされる有様だった。

何か嫌われるようなことでもしたかと大助に相談しても、結局二人で首をひねるばかりで、当時は何もわからなかった。

「いやあ、あの時はね。仕方がなかったというか」

「おれもさっきは、笑われたんだから。お前も、ちゃんと答えるべきだ」

「えー」

「……………」

「わ、わかったわよ」

しばらく黙って見ていると、彼女は数秒もかからず折れた。

彼女には延々と長たらしく言葉を尽くすより、じっと目を見て黙っているほうが効果的である。

「冗談だ。それで、なんだったんだ？（ほんとに嫌いだった、とかなら、話さなくていいからな？　すぐ帰る支度をするから）」

「ちがうちがう！　そうじゃない！　そうじゃなくて！」

財布を出しかけていると、彼女はあわてた様子でぶんぶんと首を振った。

なんだ違うのか。違うのか。そうか。

「そうじゃなくて、……はあ」

なぜかそこで彼女は言いよどんだ。

別に彼女を困らせたかったわけじゃない。嫌われているわけでもないようだし、このくらいにしておくべきか。

「いや、やっぱりそんな、無理にとは」

「好きだったのよ。智治のことが」

「——は？」

すき。——好き？

「好きだった。けど、もしあたしが告白して、それがどういう結果になっても、それであたしたちのそれまでの関係が変わっちゃうのが、一番嫌だった。——高校生の時って、みんなすぐ誰かと付き合いだして、でも、気づいたらいつの間にかもう別れてたりとか、そんなだったじゃない？　それですぐ友達に、別れた相手の悪口言ったりして、さ」

それは当時を思い出しているというよりは、まるで自分に同意を求めているようだった。

小さく息を吐いてから彼女は言葉を続ける。

「そういうふうになっちゃうのが、やだったんだ。あたし的に。友達としてで、もう十分なのに。十分すぎるのに。なのに近くにいると、智治のこと、気づいたら目で追っちゃってたし。たぶん、すぐにばれちゃうから。困っちゃって。だからしばらくの間、離れてようって、考えたんだ」

彼女はそこで一度言葉を止めて、そして仕切り直しとでも言うように、ぱちん、と眼前で両の手のひらを打ち合わせた。

「まあでも結局、そのすぐ後に智治は他の娘と付き合い始めて、めでたくあたしの恋心も散りましたっ、てわけで！　三年生からは元通り！　それまでと変わらない唯一無二の親友として、それで今に至ってるってわけで」

——そうだった。三年になって、彼女ができて、そうしたらいつの間にか、彼女は当たり前みたいにその場所に戻っていた。

あの時は、それで全部終わったと思っていたけど。

「……おれに、彼女ができたから？」

「うん。それでやっと、吹っ切れた。夏くらいからは受験勉強もあったしね。ちょうどいい機会だったのかな」

彼女は懐かしむように、口元にうすく笑みをたたえていた。

「……ぶっ、あは、はははっ」

「あー。だから言いたくなかったのに。人の失恋話聞いて笑わないでよっ」

「いやっ、これは笑うしかないだろ。すごいな、全然気づかなかった」

「もうっ。じゃあはいつ。この話はおしまいっ。つぎはまたあたしの番ね」

彼女はまたぱちんと両手を合わせると、意地悪そうな笑みを浮かべてそう言った。

「それじゃあ、智治に質問っ」

「質問？ 昔話は、もういいのか？」

「それもいいけど、まずは質問に答えてからね。智治、今って誰か付き合ってる人いるの？」

「……なんだ、いきなりすぎやしないか、その質問」

「だってさ、話してて思い出したんだけど、高校の時に智治が付き合ってた娘、智治とクラスも離れてたし、それまで全然接点なかったじゃない？ なのに急に付き合いだしたから、私じゃなくてもびっくりしてたのよ。あのとき。ちょっとした話題になるくらい」

知っている。あの頃、友達からは何度も聞かれた。なんであの子を好きになったのか。

付き合っていたら好きなのか？ 普通はそうだろう。ただ、当時の自分は頭がおかしかった。普通じゃなかった。

「……昔の話だ。もうその子の顔も、名前も、今はほとんど覚えてない」

その子の人柄や、容姿のどこかに惹かれたから付き合っていたわけじゃない。正直別に好きじゃなかった。好きでも嫌いでもなかった。

ただほんの少しだけある人に雰囲気似てたから、自分の抜けた穴を埋めるのに、利用していただけ。最低だ。

「ふーん。そんなもんなのかなあ。ま、あのころは私たちも若かったからねー」

「まだ十分、若いだろうに」

目をやると、彼女はまたドリンクのメニュー表を手に難しい顔でにらめっこしていた。

まだ飲むのか。ちらりと店内の奥のほうに目をやると時計はすでに十時を少し回っている。

「おい美咲。そろそろ、やめておけよ。明日も朝は早いんだろう？」

そう言ってメニュー表を取り上げると、彼女は途端に不満そうな面持ちでこちらを見てくるが、壁時計のほうを指差してやるとようやくあきらめたようだった。本当にしぶしぶという感じだが。

「えー。もうこんな時間？ なんか一時間もいた気がしないんだけど」

「それはお前が、いきなり焼酎なんか飲んで、そうそうに酔いつぶれるのが悪い」

「もーっ。起こしてよ！ 見てるだけじゃなくてっ。せっかくひさしぶりに会えたのに、こんなじゃああたし全然飲み足りないっ」

他の人の迷惑になるから、腕をそう振り回すのはやめてほしい。というか、まだ酔ってるのか。

近くの店員を呼び止める。

「すみません。ウーロンふたつ」

「ねえってばっ！ 飲みーたーりーないっ！」

「また今度、大助も交えて飲みに来ればいいだろう。それぐらいならいつでも、都合はつける」

ほんとにっ？ と、途端に表情を明るくした彼女は、にこにこ上機嫌な様子で皿に残っていた串焼きの処分を始めた。

すぐに茶色の液体がなみなみと入ったグラスを店員が運んで来る。受け取ったうちの一方を彼女にも渡して、その後どちらからともなくグラスを合わせた。かちん、と安っぽい音がした。

「……おめでとう、本当に」

「うん。ありがと。結婚式の時スピーチ、楽しみにしてるからね？」

——それは。

「おれで、いいのか。そんな、大事な」

「智治がいいのっ。あたし達のことをあたし達以上に知ってるのなんて、智治しかないんだから。だからちゃんと、あたしが小さい頃から天使みたいにかわいくて、それでとってもいい子でしたって、みんなに言ってね？」

そんな風に冗談めかして笑っている彼女を見ていると、結婚なんてまだまだ先の事なんじゃないかと思ってしまう。

だけど違う。そうじゃなくて、ただ自分が気づいていなかっただけで、彼女もいつの間にか大人になっていたのか。

「言ってる。おれは、本当の事しか言わん」

「なにそれっ、本当はかわいくないってことー？」

そう言って彼女は全然怖くない表情で凄んでくる。

それが変におかしくて、だからだろうか。

「いや、……そうだな、きれいになったよ。美咲は。本当に」

思わず言葉が、口の端から零れ落ちた。酔っていたのはどうやら彼女だけではなかったらしい。

そう言うとも彼女も意外だったのか、一度目を丸くした後で、しかしすぐにニマニマとだらしなく口元を緩めていた。

「んふふー。ありがとっ。智治、今日はやけに素直じゃん」

「おれも、酔ってるのかもしれないな」

「じゃあこれ飲んだら、酔い覚ましにラーメン食べに行こうよっ」

そう言って彼女はグラスの中身を一気に飲み干した。直後、だんっ、と勢いよく置かれたグラスがテーブルを震わせる。

思わず苦笑する。彼女は本当にまだ飲み足りないらしい。

「いや、それだと」

結局、遅くまで飲むことになるのではと、そう続けようとして。

突然糸が切れたように、彼女がふにやりとテーブルに倒れこんだ。

「美咲？ どうした？」

「うええ。気持ち悪い……」

「……おい、大丈夫か？」

眉間にしわを寄せているところを見ると、どうにも冗談ではないらしい。急にどうしたのだろうか。飲み過ぎたのか、それとも我慢していたのか。まあ、ともかく。

「これじゃあラーメンは、食べれそうにないな」

おれは彼女の背中をさすってやりながら、とりあえず水を貰うべく、近くの店員を呼ぶことにした。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「あー。きもちわるいー」

頭のすぐ後ろで、彼女が何回目かの呻き声を上げる。その声はまだ少し弱々しい。けれど、そんな風に呻いていられるのだから、少なくとも大事には至らなかったということでもいいのだろう。

「大丈夫か？」

そうしておれも、こうして何回目かになる言葉を、背中にいる彼女にかけてやる。

「むーりー。目の前がさっきからぐるぐるするー」

そう言って彼女はふたたび呻き始めた。

なるべく彼女の負担にならないように、背中の小柄な体をそっと背負いなおす。

「……災難だったな」

受け取ったグラスの中身がなぜかウーロンハイだった。つまりはそういう話。

彼女に言われた時はなんの冗談かと思ったが、試しに自分のグラスに口をつけてみると、それは確かにほんの少しアルコールを含んでいるようだった。

どうということかと店員を呼んで確認してもらおうと、どうやら新しく入ったばかりの

研修生が他の席と注文を取り間違えてしまったのだという。

いろいろと思うところはあったが、とりあえず、そういうわけで。

もともと許容量ぎりぎりだったところにウーロンハイを一気飲みした彼女は、それからしばらくの間うんうんと唸り続け、終電近くになっても立ち上がるのさえ難しい様子だった。

そんな状態の彼女をひとりで電車に乗せるわけにもいかず、かといってタクシーを呼ぼうにも、今の彼女のナビゲートではきちんと自宅までたどり着けるか不安で仕方がない。結局、大助には申し訳なく思いながらも、彼女をおぶって実家まで送っていくことにしたのだった。

「ともはるー」

不意に、呻くばかりだった彼女が声を上げた。

「どうした。気持ち悪いか？ 吐きたいんだったら、頼むから、ちょっと待ってくれ。今すぐ降ろすから」

「そんなんじゃないくてー。クーポン貰えてよかったねえって」

そう楽しそうに話す彼女の言葉を聞いて、降ろしそうになっていた彼女を静かに背負いなおす。

「……そうだな」

居酒屋を出る時に店長とおぼしき大柄の男性がやってきて、こちらの不手際だからと、千円分のクーポンを渡してきた。

が、そんな程度で腹の虫がおさまるはずもない。あの時渡されたものによっては、彼女はもっと危ない目に遭っていたかもしれないのだから。

しかし、当の本人がこの様子で自分だけがいつまでも腹を立てているわけにもいかず、なんとなく胸にもやもやしたものを抱えながら、心の中でもう二度と来ないぞと捨て台詞を吐いて、おれたちは居酒屋を後にしたのだった。

「だけど美咲、お前だって、場合によっては危なかったんだからな。もっと、怒ってたっていいんだぞ」

「でも、そしたら智治が助けてくれるじゃん」

どこかぼんやりとした声でそう言った彼女に、何か言葉を返そうと口を開いて、結局何も言えないまま、ただ小さく息を吐いた。

吐息はすぐさま白いもやへと変わって、視界の両脇をゆっくりと流れていく。

「……ねえ。智治。あたし今、すごく酔ってるから、だから聞いちゃうけどさ」

「ああ」

「もしあのとき、あたしが告白してたとしたらさ、智治はなんて答えてた？」

考える。

もしも、高校時代のどこかのタイミングで、何かが違ったとして、ある時に彼女から、自分のことが好きなのだと、付き合ってほしいと、そう告げられたなら。

自分は何と答えただろう。どんなことを思っただろう。

決まっている。

そんなこと、考えるまでもない。

目を閉じて、できるだけ何気ない声音を装うようにして、おれは言った。

「——案外、断ってたかも、しれないな。昔のおれも、美咲たちとのあの関係が、一番心地いいと、きっとそう思っただろうから」

ウソだ。

「そっか。……あーあ。やっど、ちゃんと振られた気がする」

そう言って彼女は大きく息を吐いた。

そうしてお互い、何も喋らないまま、おれは彼女を背負って歩き続ける。

想う。

言葉にはしない。ただこの想いの、その千分の一だけでも、背中にいる彼女に届くように。

好きだった。ずっと好きだった。初めて会った時からずっと。時間が経つほど想いは募って、今さら自分ではどうしようもないほどに。

もしも、大助じゃなくておれを選んでくれたらと、そう思わない日はなかったよ。筋違いだとわかってはいても、どうしようもなくやるせなくて、妬ましくて、大助のことを恨んだりもした。

でも違ったんだ。おれがああとき本当に恨むべきだったのは、大助じゃなくて、もちろん君でもなくて、当時の自分の馬鹿さ加減だ。

おれはひとりで失恋した気になって、勝手に美咲のことを吹っ切るために、よく似た相手と付き合っただけ。

そのせいで、君の恋を終わらせてしまったのか。

だけど。

だからといって、今さらそうだと知ったところで。

今になって自分が美咲を好きだったと言えば、親友二人を悲しませることになる。

それはできない。するわけにはいかない。だから。

「なあ、美咲。……月がきれいだな」

おれはただそう言って、少しだけ欠けた月を見上げた。

凍てつくように冴えた夜の空は高く。

天頂に浮かぶ月の柔らかな光だけが、暗い帰りの道を煌々と照らしていた。

背中が彼女がほう、と白い吐息を漏らす。

「……ほんとだね」

彼女の表情は見えない。だけどなんとなく、その声は笑っているような気がした。

「ねえ、智治」

「なんだ、美咲」

「あたしね、結婚するんだ」

「そうか。幸せになれよ」

「うん。……だからさ、これからも、あたしが結婚して、智治も結婚して、あたし達に子供ができて、孫ができて——」

彼女のやさしい声音が、冷たい空気を震わせる。

彼女が言っているのは未来の話だ。はっきりとした輪郭のない、あやふやなこれからの話。

「——あたしがおばあちゃんになって、智治がおじいちゃんになってもずっと。ずっとあたしの、あたし達の、一番の親友でいてくれますか？」

自分が君にとっての特別でいていいんだと、そう言われることが、おれにとってどんなに嬉しいか、君はきっと知らないだろう。

だからこそ、おれはこうして身を引けるのだ。二人の親友として、彼女たちを素直に祝福してやれる。

「……ああ、当たり前だ。おれたちは、どれだけ経っても、ずっと親友だ。それは、絶対に変わらない」

「……ありがと。——大好きだよ。智治」

初めて恋した彼女だから、その忘れ方もわからない。

この胸に灯る小さな残り火は、ふとした拍子に火の粉を散らして胸を焼く。けれど、甘くて切ないその痛みを、おれは生涯大切に、胸に抱いて生きていく。

「おれも、大好きだよ。美咲」



